

研究分野のキーワード：美術史，江戸時代，琳派，宗達，尾形光琳

研究紹介

私が研究しているのは、江戸時代を中心にした日本の絵画史です。絵画史をはじめとする美術史という研究分野は、美術作品を対象としている点で鑑賞と似ていますが、その方法や目的は違っています。美術鑑賞が作品を見て印象を深めるのに対して、美術史では作品を歴史の流れの中に置いて理解しようとしています。ここでいう歴史の流れは、大きく分けると二つあり、一つは作品の流れです。有名な画家が描いたよく知られている作品でも、既にある作品を学んで、それに独自の工夫を加えていることがほとんどです。従って、美術史では、先行作品をどのように踏まえて新しい作品が生み出されているのかを明らかにしようとしています。もう一つの歴史の流れとは、作品が制作された当時の文化や社会の状況です。画家も社会から孤立して生きていたわけではありませんし、江戸時代までの絵画の大半は注文を受けて制作されたものです。従って、描くテーマ（主題）をはじめ、文化や社会の状況を反映していることもしばしばあり、制作された作品が社会の中でどのように機能していたのかも社会の状況に依ります。美術史では、そのような、制作時点での文化や社会の状況とどのように関わりながら作品が生み出されたのかを問題にします。

私の場合、日本の絵画史の中でも、「琳派」の名で知られている宗達や尾形光琳を中心に研究を進めています。建仁寺（京都）に所蔵されている国宝の「風神雷神図屏風」の筆者として知られている宗達ですが、伝記についてはよく分かっておらず、何年に生まれ何年に亡くなったのかも明らかではありません。宗達は「俵屋」を屋号とする絵屋という、絵画を制作する工房を主宰していたようなのですが、その工房（宗達派とも言います）についても分からない点が多く残されています。そうした中、宗達やその次の世代の宗達派の画家が手がけた「伊勢物語図色紙」を取り上げ、少し前に出版された嵯峨本『伊勢物語』の挿絵と合わせて、17世紀前半に制作された伊勢物語絵の場面選択にどのような特色が見られ、それが当時の文化や社会の状況をどのように反映しているのかを明らかにしようとした論文を発表しました。また、宗達派が制作した「伊勢物語図屏風」についても研究を進めつつあります。

「琳派」を代表するもう一人の画家、尾形光琳の場合、宗達とは違って、当時の画家としては伝記については比較的よく分かっています。これは、光琳の子孫に関係する資料が残されていたためでもあります。江戸時代後期に酒井抱一をはじめとする人たちが光琳の伝記や作品を解明しようとした成果です。しかし、江戸時代後期の光琳研究を批判的に検証した上で作品研究を進める時期に来ており、江戸時代に光琳やその作品がどのように評価されていたのかを明らかにしつつあります。

